

中部大学『魅力ある授業づくり』
5年間の取り組みを振り返って
－2018年度から2022年度の実践と振り返り－

1. 本報告書について
2. 2018年度以降の全学FD活動重点目標『魅力ある授業づくり』の推進
3. 2018年度以降のFD活動の検証
4. 今後の全学FD活動重点目標『魅力ある授業づくり』への
取り組みに向けた課題と展開

中部大学 FD活動評価点検委員会

中部大学『魅力ある授業づくり』5年間の取り組みを振り返って —2018年度から2022年度の実践と振り返り—

1. 本報告書について

『魅力ある授業づくり』とは本学のFD活動における重点目標である。この重点目標は、2007年度のFD委員会（2019年度よりFD・SD委員会へ名称変更）において検討が始まり、2008年4月に正式に制定された。その後、当該目標の下に実施された全学的なFD活動について5年ごとに評価・点検が為され、その詳細が2013年および2018年にそれぞれ報告書としてまとめられた^{1,2}。本報告書は、前回の振り返り以降の5年間（2018年度から2022年度まで）におけるFD活動の評価・点検内容を総括し、今後の方向性を見出すことを目的としてまとめられたものである。

なお、この重点目標『魅力ある授業づくり』は制定当初は5年間継続することを目安としていたが、2012年11月に開催したFD委員会において、2013年度以降も引き続き目標とすることが決まった。同時に、その意図するところをより明確に学内外に広く提示することが望ましいとして、以下の枠内の通り定めた内容を2013年度より公示している。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
（教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
（教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
（学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

2. 2018年度以降の全学FD活動重点目標『魅力ある授業づくり』の推進

2018年度以降の全学FD活動を振り返った際に、まずは社会全体に大きな影響をもたらしたコロナ禍について触れざるを得ない。2013年以降、本学では質および量ともに充実したFD活動を展開してきたが、2020年の春に突如として発生した新型コロナウイルスの感染拡大により、様々な活動の中止や延期が相次いだ。例えば、2020年度春学期には学生による授業評価が中止になったほか、FD・SD講演会の開催中止や、授業サロンおよび全学公開授業の募集停止等、特に対面型の活動が大きな制約を受けた。

その一方で、ICT技術を活用した遠隔授業が教職員や学生間に広く浸透したことを反映して、それらの技術の活用がFD活動においても新たな活路を開いた。特に新型コロナウイルスが猛威を振るった2020～2021年度にかけては、遠隔授業の事例を紹介したFDカフェの開催や、オンラインツールの利用方法の詳細を説明したキャリアアッププログラムが開催される等、遠隔授業そのものを題材とした企画が数多く開催された。その後、社会活動の正常化に伴い、授業サロンや全学公開授業等の対面型イベントも定期的で開催されるようになり、2022年度のFD活動件数はコロナ禍以前を上回る水準にまで達した。ただし、当該年度においても内容によっては、オンライン、オンデマンド形式やハイブリッド形式を採用する等、柔軟な運営方法がとられており、一部の企画ではこのことが参加者増につながっている。このようにコロナ禍が本学のFD活動に与えた影響は功罪ともにあっただと言えよう。

さらに、この5年間における本学FD活動の特徴として学外との連携強化も上げられる。特に、本学が2012年に加盟した全国私立大学FD連携フォーラム（略称JPFF）では地域担当幹事校（2020年6月より）、さらには代表幹事校（2021年6月～2022年6月）を担当した。このフォーラムは、中規模以上の私立大学間でのFD分野における連携を目的として、2008年に発足されたものである。特に2021～2022年度において本学は代表幹事校として、各種委員会活動はもとよりミーティングや懇談会企画等の大学間での情報交換や人的交流を志向した活動を行った。これらの活動を通じて得られた経験や情報は本学のFD活動へ還元され、それらの内容のより一層の充実に資することとなった。

以下に『魅力ある授業づくり』の推進に関する組織や取り組みについて項目別に記す。

1) 本学のFD活動組織体制

図1のように、学長を委員長とした全学FD・SD委員会のもと、各学部FD委員会および各学科組織があり、全学体制のFD活動WGが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会やFD活動評価点検委員会が組織されており、FD活動の内容について評価できる体制が整っている。主管部署として、大学企画室高等教育推進部がFD活動の推進・支援を行っている。全学FD・SD委員会により企画・開催されるFDプログラムは、大学教育を支援する職員のSDプログラムとしても機能しており、職員も教員と共に参加することで自らの職務遂行上の資質向上に役立っている。

また、「大学設置基準等の一部を改正する省令」が2017年4月1日から施行され、SD（Staff Development）が義務化されたことを受けて、本学の教員・職員のキャリア形成を図る組織的な取り組みを推進するため、2019年度に全学FD委員会を全学FD・SD委員会に再編し、その専門委員会としてSD活動WGを新たに設置した。

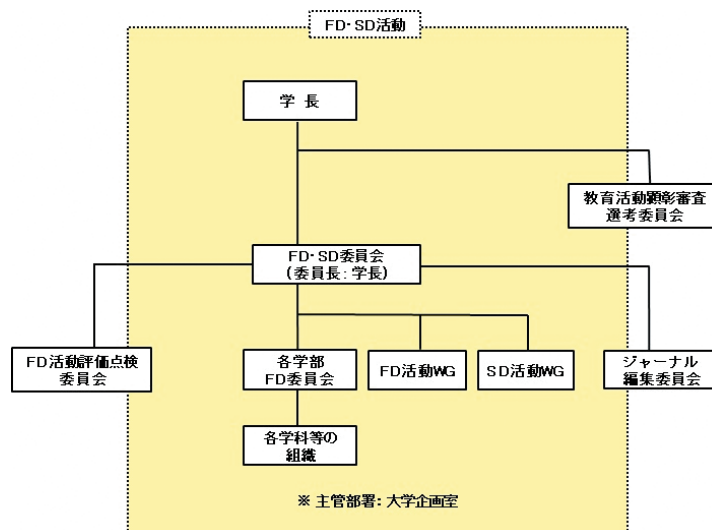


図1 中部大学のFD・SD活動組織図

FD・SD委員会：本学のFD・SD活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD活動WG：FD・SD委員会の専門委員会として、学部代表のFD委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

SD活動WG：FD・SD委員会の専門委員会として、SD活動の全学的な推進を図る。

FD活動評価点検委員会：本学のFD活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会：教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

ジャーナル編集委員会：FD・SD委員会の専門委員会として、高等教育（大学教育）全般に関する研究成果、および本学での教育に関する分析研究、実践報告等を学内外に発表するために『中部大学教育研究』を発行する。

2) 教員個人における教育活動の評価点検

本学では「教員活動重点目標・自己評価シート」において、全ての教員が年度当初に教育活動に関する重点目標を立て、年度末に自己評価を行っている。内部質保証の観点から、教育のみならず研究、社会貢献、学内行政等についてもそれぞれの活動について評価・点検の実施、改善向上が求められており、「教員活動重点目標・自己評価シート」では、大学教員としての4つの責務（教育・研究・社会貢献・学内行政）についても、それぞれ自己評価を実施している。なお、目標設定後および自己評価後は、同シートを学部長、学長が点検し、組織のFD活動に役立てている。

2018年度からは、大学設置基準上で教員と区分される助手（教育・研究の補助を主たる職務とする）も対象とし、これを機に全学部共通のレイアウトに変更した。

3) Webを利用した授業評価

① Webを利用した「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

授業評価は、各学期末に原則として学部対象の全ての授業科目において「学生による授業評価」をWebを利用して共通設問で実施している。設問は、授業形態にかかわらず同じ選択形式の設問を8問（他に学生自身の状況を問う設問を2問）、加えて自由記述欄を設けている。教員が担当したすべての授業（複数担当による授業を含む）を振り返って回答する「教員による授業自己評価」では、教員はこれらの回答結果を総合的に分析して、自由記述のまとめを含む教員からのコメントを学内に公開している。授業評価の結果は、今後の授業改善のための資料として、また、教員を対象とした教育活動顕彰制度のポイントとしても活用している。

2019年度から、10年続けてきた授業評価項目について変更し、「シラバス」に関する設問を設定した。なお、2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止に鑑み、春学期はほとんどの授業が遠隔中心とした実施となり、対面授業を想定した設問項目は実態と乖離があるため、春学期は授業評価の実施を中止することになった。秋学期からは遠隔・対面授業双方に対応できるよう、設問内容の一部の修正および補足説明の追記を行ったうえで実施した。

回答結果には、新型コロナウイルス感染拡大を境に大きな変化がみられた。いずれの項目の回答率も大幅に改善していた。これは遠隔授業に切り替わったことにより、教員、学生双方にWebへの依存度が高まったこと、不慣れな授業形態への不安や不満等が影響していると考えられる。一方で、遠隔授業の教育効果が授業評価を押し上げたことがコメント等から推察された。新型コロナウイルス感染拡大により社会全体のオンライン化の流れが進み、大学の授業形態にも影響を及ぼした。今後の大学の授業のあり方を再検討しなければならないことを示唆している。

② 授業改善アンケート「Cumoc（キューモ）」システムの提供

「Cumoc（キューモ）：Chubu University Mobile Clicker」は、スマートフォンや携

帯電話を活用して、授業中に学生の反応を瞬時に把握できる本学独自のクリッカーシステムである。

クリッカーは、授業を双方向対話型にするために受講者からアンケートや回答をリアルタイムに回収、結果を公表できる仕組みである。「Cumoc」を用いた授業の運用方法は、教員や授業形態により様々であるが、その回答結果に基づいて授業進度等をその場で随時見直しできることや、ティーブレイク的な使い方により受講生の緊張感を持続させる効果、また受講生の授業への参加意識を高める効果を狙う等の多様な活用法があり、双方向授業を構成するツールの一つとして展開してきている。

中部大学独自の非常に有効なクリッカーではあるが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う遠隔授業への切り替えをきっかけに、Google ClassroomやGoogle Forms等、同様の機能を有するソフトウェアを使用する教員も多くなり、Cumocの使用頻度は下がってきていることも事実である。今後の授業での使用に関する動向を注視する必要がある。

表 1. 授業改善アンケート「Cumoc (キューモ)」の利用件数

2018	2019	2020	2021	2022
160	135	103	104	192

4) 「授業サロン」の実施

「授業サロン」は、学部間を越えた教員（5人）による互いの授業見学に基づいた意見交換会である。

この企画の参加者は、互いの授業見学を材料として、授業の考え方、学生の反応、問題点、工夫、改善案等について、情報交換・意見交換を通じ、教育上における問題対応策や様々なケースにおける授業改善のヒントを見出すことが目的である。また、この「授業サロン」は、参加者による学部を超えた教員のFDネットワークを広げることに繋がっている。本企画は毎学期1～2グループを運営している。

2020年度春学期・秋学期は、新型コロナウイルス感染症対策のため、急遽、遠隔授業が導入され、学生への配慮や教員の遠隔授業への切り替え対応を優先させる等の理由から「授業サロン」の募集を中止した。2021年度からは再度募集を開始したが、秋学期に1件のみとなった。授業を取り巻く環境が新型コロナウイルス感染拡大に伴って大きく変化していることが影響していると考えられるが、授業技術向上のためには有効な方法であるため、今後も継続して開催できるように募集システム等も検討していく。

5) 「全学公開授業」の実施

「全学公開授業」は、授業（1コマ90分1回）を公開し、本学教職員が見学することを通じて、授業改善に活かしていくという企画である。具体的には、授業の公開を希望する教員を講師として募り、公開日を調整した後に、当該授業の授業紹介シートを公表して授業見学者を募る。見学者は教員に限らず、見学後に授業見学コメントシートを記入し、授業担当者にフィードバックするという仕組みである。

2020年度春学期は「授業サロン」と同様、新型コロナウイルス感染症対策のため「全学公開授業」の募集を中止した。2020年度秋学期に再開し1件実施、2021年度は3件実施した。遠隔授業と対面授業の両方を対面で見学した。授業サロン同様に授業技術を向上するためには有効

な方法であるため、実状に合わせて遠隔授業、対面授業のいずれでも対応していく。

6) 「FDフォーラム、FD・SD講演会、FD・SD研修会」の開催

「FDフォーラム」と「FD・SD講演会」は、高大接続やハラスメント、合理的配慮、新課程入試等をテーマに、高等教育機関として時機を逸さない、教職員にとって関心が高いテーマを取り上げて開催している。

2018年度以降の5年間で様々なテーマをとりあげてきた。「FDフォーラム」はコロナ禍もあり開催が出来なかったが、「FD・SD講演会」は12回開催している。

2022年度にはFD・SD研修会をSD (Staff Development) 研修の機会として位置づけ、「ハラスメント」をテーマに開催した。専任教職員の参加率は70%であった。今後も、時節の問題点をテーマとして取り上げていく。

7) 「キャリアアッププログラム」の開催

「キャリアアッププログラム」は、多様化する学生や教育方法に対して教員が知るべき知識や技術を修得できるように少人数で実践的なワークショッププログラムとして実施している。テーマも多岐にわたり教員にとって関心が高いテーマを取り上げて開催し同じ内容のプログラムも定期的で開催している。同プログラムは、SDプログラムの一環として職員の参加者が多く、本学FD推進における教職協働にも繋がっている。

2018年度から5年間で「授業デザイン (シラバスの書き方、授業の進め方、授業内容、マイクロティーチング等)」9回、「授業技術・運営 (話し方、板書、ノートの取らせ方等)」34回、「ICT (情報通信技術)」17回、「学生への応対 (私語対策、ほめ方、叱り方、謝り方等)」13回等、延べ73回と、2008年度から2012年度の5年間に実施した22回並びに2013年度から2018年度の5年間に実施した49回から大幅に増加している。

2020年4月に、新型コロナウイルス感染症対策のため、急遽、導入された遠隔授業をサポートするため、CoursePower等の活用方法をテーマとしたキャリアアッププログラムを緊急的に全12回開催した。遠隔授業が必須となる以前までは、中部大学の学習管理システム (LMS) であるCoursePowerを使用したことのない教員が少なくはなく、特に非常勤講師では対応に苦慮していたため、1ヶ月で12回開催という異例の頻度で非常事態に対応した。また、現役アナウンサーの客員教授による「話し方講座」もZoomを用いた「オンラインにおける話し方の留意点」等、遠隔授業のスキルを上げる方策をとった。さらに、新型コロナウイルス感染拡大に伴う学生の気質の変化が問題となっていることから、この点をテーマに取り上げ、学生相談室の教員による講義、ディスカッションのプログラムも取り入れた。

8) 「FDカフェ」の開催

「FDカフェ」は、大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している大学教職員にとって必要な知識等の実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催している。同プログラムは、教職員が気軽に情報交換や意見交換を行うことで互いの教育力向上を目指しており、この企画への参加者による全学にまたがるネットワークづくりも狙いとしている。原則として各回のテーマを定め、話題提供者の概説、ファシリテーターの進行による意見交換というグループ研修の形態として運営している。

内容は、毎年恒例の新任教職員向けの意見交換、「私の授業づくり」とシリーズ化した教員

の授業デザイン等の話題提供、コロナ禍による遠隔授業の円滑な実施に向けたICTを活用した授業づくり等の情報交換等を行っている。2018年度から2022年度の5年間に、春学期5回、秋学期4回の計9回実施した。

学生によるプレゼンテーションも盛り込み、学生目線でのICTツール活用についてのアイデアも共有する場となった。さらに、各学部から推薦された話題提供者によるパネル討論形式で運営し、授業づくりについての多様なアイデアを共有および交換する等、新たな試みも開催された。

9) 「FDオンデマンド講義」の提供

本学が加盟している全国私立大学FD連携フォーラム（JPPF）が運用している「実践的FDプログラム オンデマンドサービス」を希望者に対して、中部大学「FDオンデマンド講義」として提供している。4つのアカデミック・プラクティス（教育、研究、社会貢献、管理運営）に関連した教育学をはじめとした系統的な理論の講義を受講する場として、毎年、専任教職員を対象に募集し、組織や個人単位での教育力向上を目的として利用されている。

10) CUルーブリックライブラリ

成績評価方法の1つであるルーブリック評価の支援のために、ルーブリック表の「共有」と「作成支援」を目的として、「CUルーブリックライブラリ（Chubu University Rubric Library）」を運用している。教員は簡単に個人ライブラリーとして登録することができ、他の教員でも公開用のルーブリックについては授業形態、評価対象に条件を設定して検索することができるシステムである。

表2. 各年度末におけるCUルーブリックライブラリ登録件数（非公開含む）

2018	2019	2020	2021	2022
19	20	30	34	42

11) 教育活動顕彰制度

「中部大学教育活動顕彰制度」は、本学における教育活動の分野において優れた功績を挙げた教員を顕彰する制度である。「教育活動優秀賞」（教育活動全般を総合的に評価し、特に優れた活動をした教員を表彰するもの）、「教育活動特別賞」（特筆すべき教育活動実績を挙げた教員等を表彰するもの）、「教育活動金虎賞^{きんこら}」（教育活動優秀賞の受賞が通算して4回目となる教員を表彰するもの）が授与される。

受賞者の審査は、教育活動顕彰審査選考委員会において毎年厳正に行っている。そのうえで受賞者の選考理由や審査選考委員会による選考総評等をホームページ上に公表している。大学からは名誉を刻する記念の楯を授与し、受賞者のコメントをホームページ上において公表している。

表 3. 中部大学教育活動顕彰制度年度別受賞者数

教育活動 顕彰制度	受賞者属性（評価学部）	2008～ 2012	2013～ 2017	2018	2019	2020	2021	2022	2018～ 2022
教育活動 優秀賞	工学部	20	18	6	4	3 [1]	7 [3]	6 [2]	26 [6]
	経営情報学部	7	5	3	0	1	2 [1]	0	6 [1]
	国際関係学部	6	6	2	2 [1]	1	0	0	5 [1]
	人文学部	11	11	0	0	4	3 [1]	0	7 [1]
	応用生物学部	6	10	0	1	3	0	2	6
	生命健康科学部	7	4	1	0	1	3	3	8
	現代教育学部	5	10	0	1	0	1	3	5
	人間力創成教育院（全学 共通教育部、教養教育部）	4	10	0	2	1	0	1	4
	教育担当副学長	—	—	—	—	0	0	1	1
	小 計	66	74	12	10 [1]	14 [1]	16 [5]	16 [2]	68 [9]
教育活動 特別賞	個人	3	2	1	0	0	1	1	3
	組織・グループ	3	4	0	0	2	0	0	2
	小 計	6	6	1	0	2	1	1	5
合 計		72	80	13	10	16	17	17	73

※本制度では、学部には所属しない教員について評価する学部等を別途定めており、「評価学部」という。

※ [] 内は、金虎賞受賞者数（内数）。

12) 中部大学『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを勧奨し、FDプログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD・SD委員会が主催しているFDプログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットやWeb上で公開されており、3年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。

2022年度には7人の教員に修了証を授与した。なお、前述の7人は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、授業サロン等の必須プログラムが実施できなかったこともあり、特例措置として、2018年度からの4年間で修了要件を満たした修了者である。

13) 中部大学発『魅力ある授業づくり』作品コンクール

4年ごとに『魅力ある授業づくり』に関する作品コンクールを開催している。学生から募集テーマにそった作品を募集し受賞者を決定するだけでなく、作品集の作成・発表、受賞者と学長との懇談会、受賞者と教員との討論会等も行ってきた。本活動は学生参加型のFD活動といえよう。

2021年度は、「第3回中部大学発『魅力ある授業づくり』—学生と考える「魅力ある授業」—」と題して、学生との討論の場を加味する形で実施した。授業改善に関する様々なアイデア・意見や授業あるある・つぶやき、川柳を募集し、前者38件、後者91件、計129件の応募があった。第1次審査（学生選考委員16名、FD・SD委員32名）、および第2次審査（FD・SD委員会）を通じて、Good Idea賞を8件選定した。授賞式・発表会が2021年12月1日（水）に不言実行館アクティブプラザ1階のアクティブホールで開催され、受賞者8人によるプレゼンテーショ

ンを基調とし、フロアの参加者も巻き込んだ活発な討論が行われた（参加人数：教職員70人、学生44人 計114人）。記録集を作成し、冊子配付の他、Webで公開している。

14) 学修成果に関する調査の実施

本学の教育における質の保証について、「学生の主体的な学び」に向けての状況や学生の学修成果に関する状況について把握し、組織としての今後の教育内容を検討する資料とすることを主な目的として、「学修成果に関する調査」を実施している。各組織からの結果に対するまとめを全学で共有し、集計結果についてはホームページ上にて学内外に公表している。2019年度末に第3回の調査を実施し、回答率は29.1%であった。

この「学修成果に関する調査」を発展的に解消し、2021年度から大学IR推進部が「学びに関する調査」として実施することになった。学生の学修成果の達成状況や満足度を把握して教育活動の改善に活用している。

15) 非常勤講師、博士後期課程の学生に対するFD 活動と職員へのアプローチ

本学で実施しているFD活動は、本学の教育を担う教員として専任のみならず、非常勤講師も対象としている。さらに、FD活動で取り上げている内容は、大学教育を様々な形で支援している職員にとっても必要な知識や技術であることから、原則としてほとんどのFDプログラムは職員も対象にして大学全体としてFD活動推進に取り組んでいる。

2020年度には、博士後期課程の学生に対し、将来学識を教授するために必要な能力を培う機会を与える仕組みを構築するため、中部大学FD・SD委員会規程を改正した。

3. 2018年度以降のFD活動の検証

以下に、本学におけるここ5年間のFD活動について、1) FD活動評価点検報告書、2) 各プログラムの実施状況、3) 本学FD活動に関する情報発信の状況、4) 「学生による授業評価」、および5) FD活動の取り組みの傾向のデータ実績の観点からそれぞれ検証した。

1) FD 活動評価点検報告書の公表

2018年度以降も、毎年FD活動評価点検委員会により当該年度の「FD活動評価点検報告書」がまとめられ、FD・SD委員会での報告および了承を得たうえで、学内外に向けてホームページ上にて公表された。この報告書には、全学のみならず、各学部や大学院研究科におけるFD活動の目標設定や実績報告も「中部大学 FD活動評価点検について（申し合わせ）」に基づいて掲載されている。

なお、上記の申し合わせは、2018年度以降も5度の改廃および改正が行われており、組織でのFD活動がより実質化するようにその内容や様式の検討が随時行われている。

2) 本学FD活動の実績

まず、2018年度から2022 年度にかけて本学で実施したFDプログラムの開催実績一覧を表4に示す。この表に示すように、新型コロナウイルス感染拡大による制約があったにも関わらず、この5年間のFDプログラム数の合計は2013～2017年度の数値と比べてそれ程減っていない。オンライン、オンデマンドまたはハイブリッド開催等、運営方法に工夫を講じることにより、活発な活動を継続できたことが示唆される。なお、2020年度の「キャリアアッププログラム」

の開催数が突出して多いのは、上述したCoursePower等の活用方法をテーマとした緊急開催があったためである（2. 7）参照）。

表4. 本学FDプログラムの年度別開催実績一覧

FD活動	2008～ 2012	2013～ 2017	2018	2019	2020	2021	2022	2018～ 2022
FDフォーラム	4	2	0	0	0	0	0	0
FD・SD講演会	11	14	2	2	1	5	2	12
全学公開授業	10	20	1	2	1	3	0	7
キャリアアッププログラム	22	49	14	14	23	11	11	73
FDカフェ	1	23	2	1	2	2	2	9
授業サロン	10	12	2	2	0	1	1	6
認定プログラム	—	47	8	9	3	9	7	36
FDオンデマンド講義	—	4	1	1	1	1	1	5
合計	58	171	30	31	31	32	24	148

※2013年から2022年に実施したコンクールや調査は含めていない。認定プログラムは、学部組織等が主催するFDに関する学内企画で全学対象に案内しているもので、申請に基づき認定したものである。

※FD・SD講演会は、2019年度よりFD講演会から名称変更した。

次に、表5-1に各種FDプログラムへの参加者数の実績（述べ人数）を示す。年度によって企画数や参加規模の違いもあるが、毎年700人前後の多くの教職員が参加している。特に2021年度に820人と際立って参加者数が多かった理由として、この年にはFD・SD講演会を例年よりも多く（5回）開催したことがあげられる。なお、FD・SD講演会については県内の4年制大学および全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）に属する大学に対して開催案内を行っており、毎回学外からの参加者が一定数得られている。

さらに、表5-2にプログラム参加者の実人数を示す。専任教員について見ると、在職専任教員数に対する参加実人数の割合（表中の(A)/(B)(%)）はどの年も40%台であった。先述した参加者数の実績（述べ人数）を考慮すると、FDプログラムへの参加者が固定化していることが伺える。今後も、より多くの専任教員がFDプログラムに参加するように促していきたい。

最後に表6に、教員個人の点検評価として実施している「教育活動重点目標・自己評価シート」の提出状況を示す。2018年度以降は、目標設定と自己評価を求めている該当者の約99%が当該シートを提出しており、この活動については大学全体にその意義が十分に浸透していると言える。

表5-1. 本学FDプログラムへの年度別参加者実績一覧

区 分	プログラム	年 度				
		2018	2019	2020	2021	2022
専任教員	FDフォーラム	—	—	—	—	—
	FD・SD講演会	74	71	58	111	129
	全学公開授業	6	21	7	22	—
	キャリアアッププログラム	68	84	199	57	60
	FDカフェ	18	12	41	21	32
	授業サロン	10	12	—	5	5
	認定プログラム	233	289	117	331	213
	小 計	409	489	422	547	439
非常勤講師	FDフォーラム	—	—	—	—	—
	FD・SD講演会	1	1	4	1	27
	全学公開授業	0	1	0	6	—
	キャリアアッププログラム	18	6	119	22	18
	FDカフェ	1	0	4	5	2
	認定プログラム	0	1	0	2	3
	小 計	20	9	127	36	50
学生・院生	FD・SD講演会	0	0	3	2	7
	FDカフェ	0	0	0	3	0
	認定プログラム	0	0	0	0	3
	小 計	0	0	3	5	10
職 員	FDフォーラム	—	—	—	—	—
	FD・SD講演会	53	109	15	126	89
	全学公開授業	3	4	9	11	—
	キャリアアッププログラム	67	53	13	14	28
	FDカフェ	2	9	0	6	0
	認定プログラム	25	31	9	57	39
	小 計	150	206	46	214	156
組 織	認定プログラム	1	2	2	1	2
	小 計	1	2	2	1	2
外 部	FDフォーラム	—	—	—	—	—
	FD・SD講演会	8	17	14	8	13
	全学公開授業	0	0	1	0	—
	キャリアアッププログラム	15	8	19	7	10
	FDカフェ	0	0	0	2	4
	認定プログラム	0	0	0	0	0
小 計	23	25	34	17	27	
合 計		603	731	634	820	684

※認定プログラムは2013年度より実施。また、2014年度よりFDオンデマンド講義を実施し、認定プログラムに含む。

※組織はFDオンデマンド講義を組織で申込みをした数。

表5-1. 本学FDプログラムへの年度別参加者実績一覧

区分（教員のみ）	2018	2019	2020	2021	2022
専任教員（A）	210	247	240	252	226
非常勤講師	11	7	107	23	31
合 計	221	254	347	275	257
在籍専任教員（B）	525	538	515	516	515
(A)／(B)(%)	40.0	45.9	46.6	48.8	43.8

表 6. 教育活動重点目標・自己評価シート 年度別提出状況

対象区分		2018	2019	2020	2021	2022
年度内在籍者		531	544	523	521	519
年度始め非在籍者		6	6	8	6	3
目標設定未依頼		14	15	9	12	16
目標設定提出		509	519	502	500	497
目標提出者の 自己評価（内訳）	自己評価提出	499	511	492	490	489
	自己評価未依頼	6	3	3	3	4
	自己評価未提出	0	3	2	1	3
	年度末非在籍	4	2	5	6	1
目標未提出者の 自己評価（内訳）	自己評価未提出	2	4	4	3	3
	年度末非在籍					
割合（％）		99.6	98.6	98.8	99.2	98.8

※「未依頼」は、何らかの理由で提出依頼をしなかった場合をいう。

※「割合（％）」は、目標提出・自己評価提出該当者【年度内在籍者から年度始め非在籍者と目標未依頼者と自己評価未依頼者を引いた数】における自己評価提出者の割合を表す。

3) 本学広報誌への情報発信と他大学等学外機関とのFD交流

本学で行っている様々なFD活動を学内外に向けて発信するために、この5年においても本学広報誌にいくつかの記事を投稿してきた。まず、本学のFDに関する紀要『中部大学教育研究』には、2020年度に「FD研修としての『授業サロン』の短期的・長期的な受講効果—授業の評価視点からの質的分析—」と題した研究論文を投稿した（No.20, pp.15-30, 2020年）。さらに、2021年度には、「学修成果に関する調査」の報告を行った（No.21, pp.107-117, 2021年）。

また、本学広報誌の学生向け『ウプト』には、第3回中部大学発『魅力ある授業づくり』—学生と考える「魅力ある授業」Good Idea賞授賞式の内容について掲載した（220号）。なお、この授賞式の様子は当日のディスカッション内容や参加した学生や教職員の声も含めた形で別途記録集としてもまとめられた。さらに、教職員向けの広報誌『ANTENNA』（No.148）には、新型コロナウイルス感染症の情報と予防法について緊急開催した第51回FD・SD講演会の開催報告を掲載した。

一方で、学外向けの活動としては、2018年度に客員教授らが大学教育学会第40回大会において「FDプログラムの効果検証—授業評価結果とFDプログラムへの参加期間との関係性—」と題した研究発表を行った。ほかに大学教育学会誌（第40巻 第2号、2019年1月）に「授業評価アンケート結果から見るFD研修の効果—中部大学における授業評価アンケート結果とFD研修の種類、効果の測定時期との関係—」と題した研究論文を投稿した。また、2019年度に『私学経営 No.539』（私学経営研究会）に、「Cumocを用いた双方向型授業の運営と効果」を寄稿した。

さらに、2章にて述べたように、全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）では2020年6月から地域担当幹事校、2021年6月から代表幹事校に就任し、幹事会・総会ならびに幹事校・会員校ミーティングの開催や、シンポジウムおよび懇談会を企画し、全国私立大学間での連携強化に向けた活動を行った。

表7. 本学FD活動の情報発信と学外に向けての活動実績一覧

活動項目	2008～ 2012	2013～ 2017	2018	2019	2020	2021	2022	2018～ 2022
「大学教育研究」	2	3	1	0	1	1	0	3
本学広報誌	21	6	2	0	1	1	0	4
学外向け活動	19	19	2	2	1	1	1	7

4) 授業評価の実績

① 学生の授業評価・教員の授業自己評価の回答率と教員のコメント率

図2に、2008年度から2022年度までの「教員による授業自己評価」と「学生による授業評価」の回答率を示す。直近の5年間に注目すると、2. 3)にて述べたように、2020年度春学期に一旦中止となった授業評価の再開直後に学生回答率が目立って増加した。その後、やや減少傾向にあるものの、比較的高い水準を維持している。一方で、非常勤講師についても再開後にコメント率の増加が見られたが、依然として50%程度であるため、さらなる増加のための方策を講じていきたい。

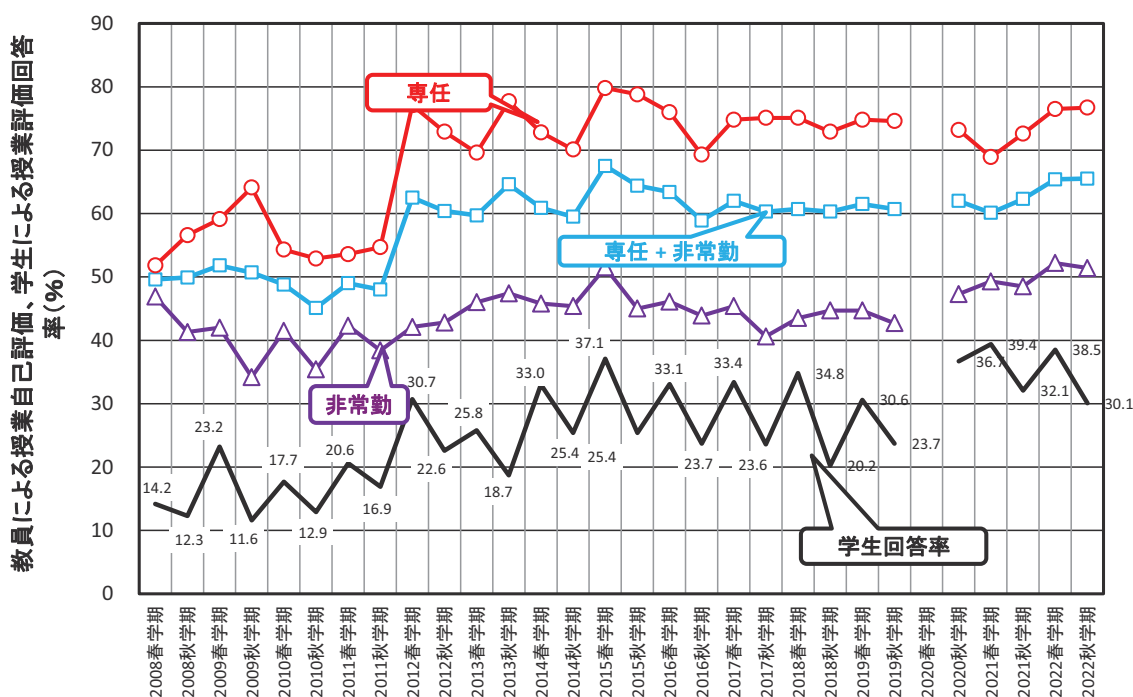


図2. 学生による授業評価 回答率

※新型コロナウイルス感染症拡大により遠隔授業を実施している状況を考慮し、2020年度春学期は授業評価を実施していない。

次に、教員のコメント率の推移を図3に示す。専任および非常勤のいずれについても、授業評価再開後にコメント率の増加がはっきりと見られた。前述した再開後における学生による回答率の増加を受けて、教員側もそれらの回答に対するフィードバックの記入を徹底したことが伺われる。

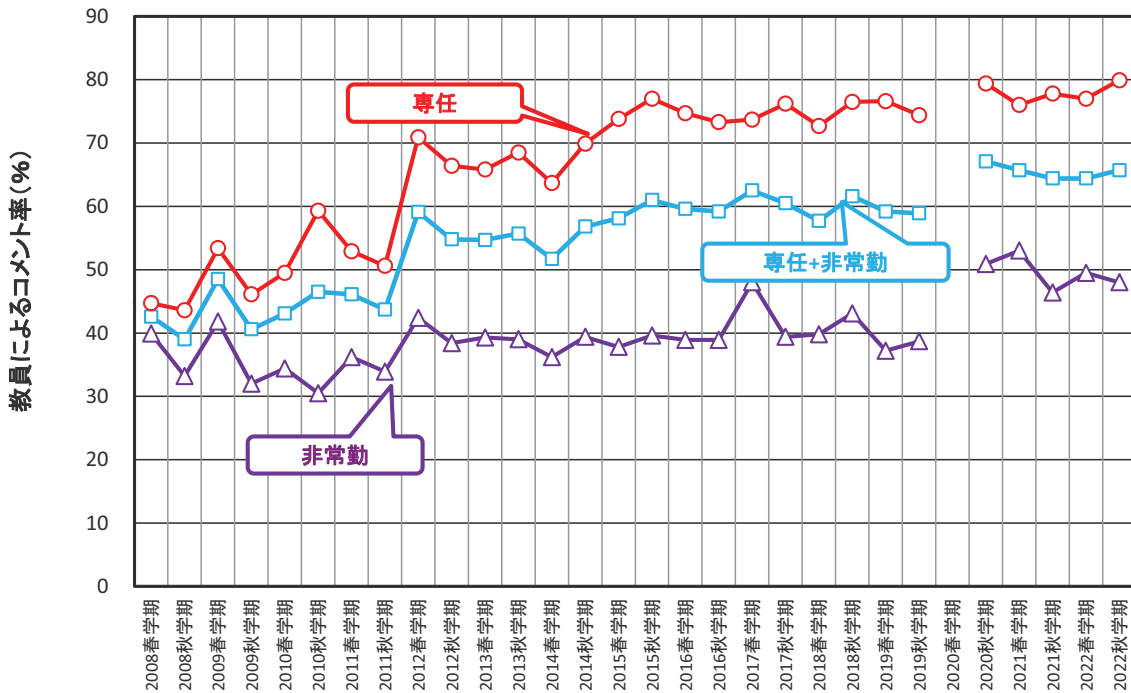


図3. 授業評価 教員コメント率 年度別推移

② 授業評価・授業自己評価の平均ポイントの推移

図4および図5に、2008年度から2022年度の15年間の「学生による授業評価」および「教員による授業自己評価」の平均ポイントの推移を示す。なお、各設問内容を表8-1～8-3にまとめた。

表8-1. 「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」の設問 (2018年度まで)

設問	「学生による授業評価」 (設問AおよびBは学生自身への問いかけ)	設問	「教員による授業自己評価」 (設問AおよびBは学生に対する認識)
1(基本項目)	: 教員は授業時間を守りましたか。	1(基本項目)	: 授業時間を守るようにしましたか。
2(基本項目)	: 教員の声は明瞭で聞き取りやすいものでしたか。	2(基本項目)	: 学生に聞き取りやすいように話しましたか。
3(授業目的)	: 毎回の授業の主題・テーマが明確に示されていましたか。	3(授業目的)	: 毎回の授業の主題・テーマを明確に示しましたか。
4(熱意態度)	: この授業に取り組む教員の熱意ある態度を感じましたか。	4(熱意態度)	: この授業に対し、熱意ある態度で取り組みましたか。
5(授業方法)	: 授業を理解させるためのいろいろな手段・工夫は適切でしたか。	5(授業方法)	: 授業を理解させるためのいろいろな手段・工夫をしましたか。
6(授業運営)	: 教員は学生の反応を確かめながら授業を運営していましたか。	6(授業運営)	: 学生の反応を確かめながら授業を運営できましたか。
7(内容理解)	: この授業の内容は理解できましたか。	7(内容理解)	: 学生に授業内容を理解させることができましたか。
8(総合評価)	: この授業は総合的に魅力的な授業でしたか。	8(総合評価)	: 学生の立場に立った魅力的な授業ができましたか。
A(学習時間)	: あなたはこの授業に必要な授業時間外の学習をしましたか。	A(学習時間)	: 学生はこの授業に必要な授業時間外の学習をしましたか。
B(学習態度)	: あなたはこの授業に意欲的・積極的に取り組みましたか。	B(学習態度)	: 学生はこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいましたか。

表8-2. 「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」の設問 (2019年度)

設問	「学生による授業評価」 (設問AおよびBは学生自身への問いかけ)	設問	「教員による授業自己評価」 (設問AおよびBは学生に対する認識)
1(基本項目)	: 教員の声は明瞭で聞き取りやすいものでしたか。	1(基本項目)	: 学生に聞き取りやすいように話しましたか。
2(授業目的)	: 毎回の授業の主題・テーマが明確に示されていましたか。	2(授業目的)	: 毎回の授業の主題・テーマを明確に示しましたか。
3(シラバス)	: 授業はシラバスに基づいた内容で行われましたか。	3(シラバス)	: シラバスに基づいた内容で授業を行うことができましたか。
4(熱意態度)	: この授業に取り組む教員の熱意ある態度を感じましたか。	4(熱意態度)	: この授業に対し、熱意ある態度で取り組みましたか。
5(授業方法)	: 授業を理解させるためのいろいろな手段・工夫は適切でしたか。	5(授業方法)	: 授業を理解させるためのいろいろな手段・工夫をしましたか。
6(授業運営)	: 教員は学生の反応を確かめながら授業を運営していましたか。	6(授業運営)	: 学生の反応を確かめながら授業を運営できましたか。
7(内容理解)	: この授業の内容は理解できましたか。	7(内容理解)	: 学生に授業内容を理解させることができましたか。
8(総合評価)	: この授業は総合的に魅力的な授業でしたか。	8(総合評価)	: 学生の立場に立った魅力的な授業ができましたか。
A(学習時間)	: あなたはこの授業に必要な授業時間外の学習をしましたか。	A(学習時間)	: 学生はこの授業に必要な授業時間外の学習をしましたか。
B(学習態度)	: あなたはこの授業に意欲的・積極的に取り組みましたか。	B(学習態度)	: 学生はこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいましたか。

※朱書きは変更箇所を示す。

表 8 - 3. 「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」の設問（2020年度から）

設問	「学生による授業評価」（設問AおよびBは学生自身への問いかけ）	設問	「教員による授業自己評価」（設問AおよびBは学生に対する認識）
1(基本項目)	: 教員からの伝え方（話し方や文書・情報等）は適切でしたか。	1(基本項目)	: 学生への伝え方（話し方や文書・情報等）は適切でしたか。
2(授業目的)	: 毎回の授業の主題・テーマが明確に示されていましたか。	2(授業目的)	: 毎回の授業の主題・テーマを明確に示しましたか。
3(シラバス)	: 授業はシラバスに基づいた内容で行われましたか。 (補足説明) シラバスに変更があった場合は、その旨の説明が行われたかを含めお答えください。	3(シラバス)	: シラバスに基づいた内容で授業を行うことができましたか。 (補足説明) シラバスに変更があった場合は、その旨の説明を行ったかを含めお答えください。
4(熱意態度)	: この授業に取り組む教員の熱意ある態度を感じましたか。	4(熱意態度)	: この授業に対し、熱意ある態度で取り組みましたか。
5(授業方法)	: 授業を理解させるためのいろいろな手段・工夫は適切でしたか。	5(授業方法)	: 授業を理解させるためのいろいろな手段・工夫をしましたか。
6(授業運営)	: 教員は学生の反応を確かめながら授業を運営していましたか。 (補足説明) 質疑応答やメール対応など幅広く想定しお答えください。	6(授業運営)	: 学生の反応を確かめながら授業を運営できましたか。 (補足説明) 質疑応答やメール対応など幅広く想定しお答えください。
7(内容理解)	: この授業の内容は理解できましたか。	7(内容理解)	: 学生に授業内容を理解させることができましたか。
8(総合評価)	: この授業は総合的に魅力的な授業でしたか。	8(総合評価)	: 学生の立場に立った魅力的な授業ができましたか。
A(学習時間)	: あなたはこの授業に必要な授業時間外の学習をしましたか。	A(学習時間)	: 学生はこの授業に必要な授業時間外の学習をしましたか。
B(学習態度)	: あなたはこの授業に意欲的・積極的に取り組みましたか。	B(学習態度)	: 学生はこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいましたか。

※朱書きは変更箇所を示す。

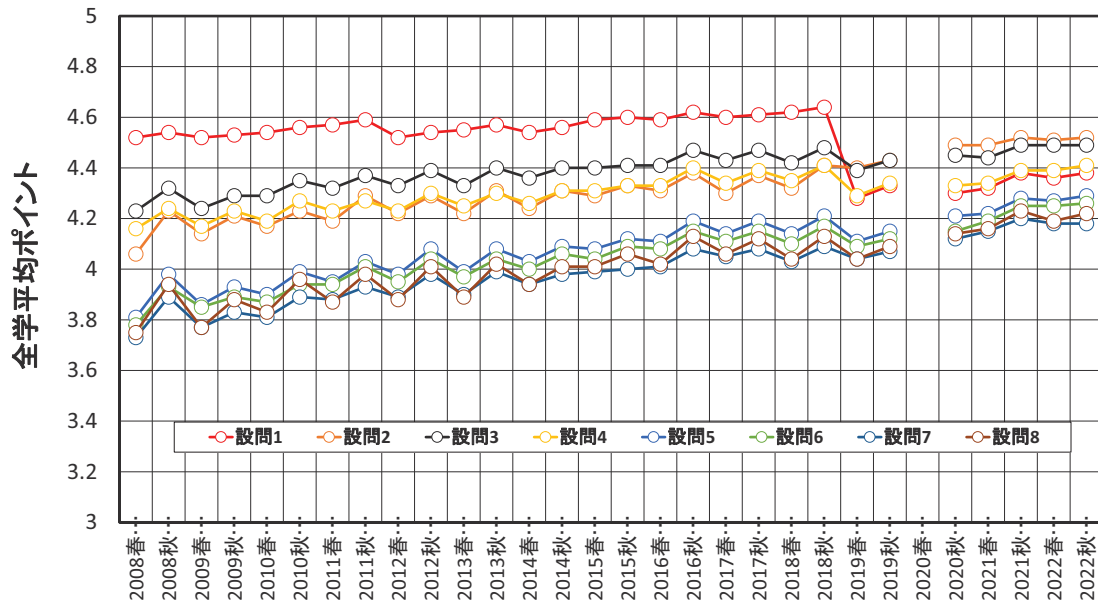


図 4. 学生による授業評価の平均ポイント

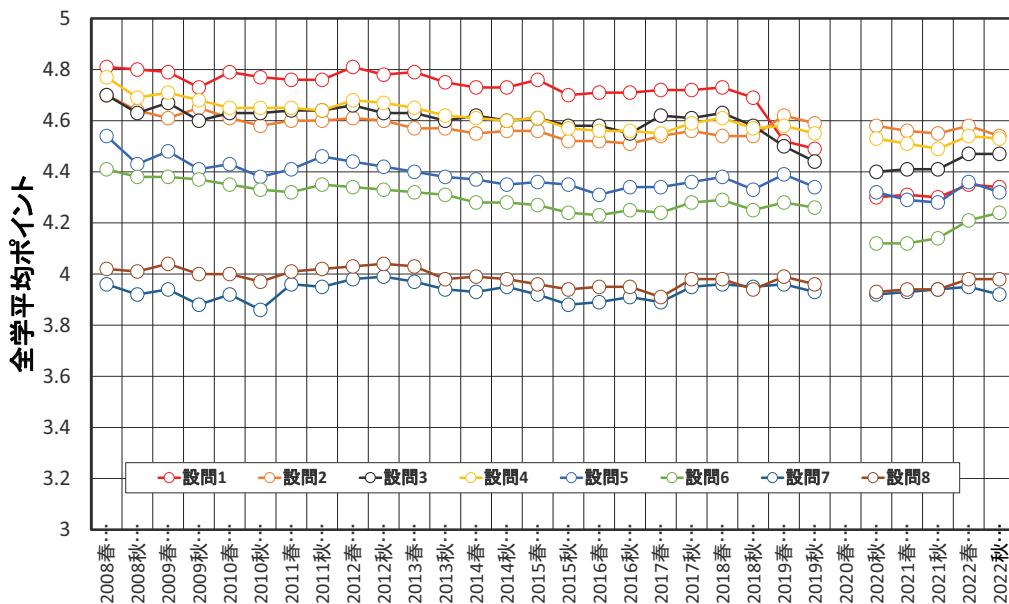


図 5. 教員による授業自己評価の平均ポイント

まず、図4に示す学生による平均ポイントはこの5年間でどの項目についてもそれほど大きな変化は見られなかった。特に、新型コロナウイルスの感染拡大の前後に注目しても、際立った増減は認められなかった。教員による遠隔授業が学生にある程度受け入れられたことが伺える。なお、現状の授業評価が開始された2008年度まで遡って推移を見ると、各項目とも着実に増加傾向が維持されていることが分かる。

一方で、図5の教員による平均ポイントの推移を見ると、授業評価を再開した2020年度秋学期において設問1（教員からの伝え方）と設問6が特に大きく減少した。いずれの項目も遠隔授業が中心であった当該年度においては、特に各種ツールの使用方法に不慣れな教員にとっては徹底が難しかった内容である。ただし、設問6についてはその後、年を追うごとにポイント数は回復している。この理由として、単に対面授業が増え、従前の授業スタイルが適用できるようになったことだけでなく、教員が自身の授業にツールをうまく利用するスキルを習得したことが考えられる。

5) FD活動の取り組みの傾向

2018～2022年度の本学のFD活動件数を、目的別、対象別、および内容形式別にまとめて、それぞれ表9-1～9-3に示す。まず、表9-1に示すように、全体的に見て2022年度には活動件数がここ数年の中で最多となった。理由として、全学のみならず各学部や学科での活動がますます活発になっていることが考えられる。さらに、表9-2に示すように、学生を含む活動件数が2022年度において顕著に増加した。教職員と学生が一丸となったFD活動が定着していることが伺われる結果となった。

なお、表9-3-2に示すように、2022年度から形式別の活動件数集約において、項目の簡略化をはかった。『魅力ある授業づくり』プログラムの認定プログラムにおけるポイント認定（座学形式は1ポイント、ワークショップ形式は2ポイント）との関連を考慮した変更である。

表9-1 目的別にみたFD活動（件数）

目的	2018	2019	2020	2021	2022
授業・教授法の改善	72	69	81	72	98
教員資質向上のための研究交流	74	66	50	73	70
FD活動企画・運営	16	26	11	35	39
	162	161	142	180	207

表9-2 FD活動の対象別にみたFD活動（件数）

対象	2018	2019	2020	2021	2022
全学対象	46	56	49	56	59
学部・研究科対象	39	41	19	32	23
学科・教育科対象	45	51	50	43	65
	130	148	118	131	147
* 表9-2のうち、非常勤講師を含む	51	44	47	47	40
* 表9-2のうち、学生を含む	46	53	29	48	58

表9-3-1 形式別にみたFD活動（件数）～2021年度まで

内容形式	2018	2019	2020	2021	2022
研修会・懇談会	28	47	37	24	—
講演・報告会	63	54	27	60	—
ワークショップ・セミナー	26	24	37	23	—
制度・システム等	16	17	25	28	—
	133	142	126	135	

表9-3-2 形式別にみたFD活動（件数）～2022年度から

内容形式	2018	2019	2020	2021	2022
講演・報告会形式	—	—	—	—	65
ワークショップ形式	—	—	—	—	38
制度・システム等	—	—	—	—	41
					144

※ 上記の3表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

4. 今後の全学FD活動重点目標『魅力ある授業づくり』への取り組みに向けた課題と展開

前回の報告書では、今後の課題としてFD活動における教職協働の推進と、学生参加型のFD活動の模索が挙げられた。まず、前者の教職協働のための体制づくりとして、2. 1) で述べたように2019年度に全学FD委員会が全学FD・SD委員会に再編され、さらにその専門委員会としてSD活動WGが新たに設置された。そのSD活動WGが中心となって企画したFD・SD研修会には多くの教職員が参加し（2. 6）参照）、FD・SD活動における教職協働のための基礎が構築された5年間となった。

また、後者の学生参加型のFD活動については、「第3回中部大学発『魅力ある授業づくり』—学生と考える「魅力ある授業」—（2. 13）参照）」に加えて、遠隔授業の改善点を学生が発表するFDカフェを開催し、数こそ少ないものの学生参加型イベントのあり方について検討を行った。さらに、博士後期課程の学生に対する中部大学FD・SD委員会規程の改定も行われ（2. 15）参照）、学生がFD活動に参加するための基盤がこの5年間で形成されたと言えよう。いずれの課題についても、今後、継続して制度の改善や企画内容の充実をはかっていく必要がある。

一方で、この5年間で振り返って以下に述べる課題も明らかとなった。

・専任教職員および非常勤講師が一体となったFD活動の取組みについて

本学では、非常勤講師もFD活動に積極的に参加しており、専任教職員と非常勤講師が一体となった取組みは『魅力ある授業づくり』の特徴の一つである。しかし、非常勤講師の授業評価における回答率やコメント率は50%程度であり、全体の値を押し下げる要因となっている。今後、授業評価の趣旨を周知徹底したり、その伝達方法についての工夫を講じたりする等、非常勤講師の回答・コメント率をより一層上げるための方策を考えていきたい。

・一部のFD活動の参加率向上について

全体的には多くの教職員がFD・SD活動に参加しているものの、一部のプログラムについては十分な参加者が集まらないこともしばしばあった。特に、2022年度には全学公開授業や授業サロン（春学期）をはじめ、他のFD活動についても十分な参加者数が得られないことがあ

た。その対策として、2022年度にFD・SD委員会やFD活動WGにおいて新任教員に対して一部のFD活動を義務化する制度（新任教員向けFDプログラム）の議論を始め、2024年度からその制度が実施される運びとなった。このプログラムは新任教員に対する授業改善支援の一環であり、本制度の導入により本学のFD・SD活動がより活性化されることを展望している。

• ICTの使用スキルの習得について

新型コロナウイルス感染症の拡大によって、本学教員も遠隔授業の実施のために、ICTの使用スキルの習得を求められるようになった。多くの教員がそのスキルを身に付け、自身の授業において活用してきた。しかし、その一方で、CoursePowerやGoogle Classroom等の本学で使用される学習管理システム（LMS）を十分に使いこなせていない教員も一定数いることがわかった。感染拡大が収束したとは言え、今後、LMSの活用はより重要になっていくことが予想される。引き続き、ICTスキルの全体的な向上とその効果的な利用のための工夫をFDの課題として取り上げていく必要がある。

【引用文献】

1. 中部大学FD活動評価点検委員会（2013）「中部大学『魅力ある授業づくり』5年間の取り組みを振り返って」『中部大学教育研究』（No.13, pp.97-113）
2. 中部大学FD活動評価点検委員会（2018）「中部大学『魅力ある授業づくり』5年間の取り組みを振り返って－2013年度から2017年度の実践と振り返り－」『中部大学教育研究』（No.18, pp.71-90）